E—20　家政学における愛情の問題

美作短大　額田　清

1. 本研究は家政学において「愛情」をいかに取り扱うべきかを考えたものである。

2. 資料はない。

3. 次のような成果をえた。

家政学の中心は家族関係にあるべきであることは，すでにくり返してこれを述べたが，家族間の問題の解決はややもすれば，「愛情」にすべてをゆだねこれに逃避しようとする傾向が見られる。しかし，愛情の問題が家政学で真剣にとり上げられたことはまだないようであり，正体のハッキリしないあいまいもことした「愛情」にもたれかかることは科学としての家政学の存立の意義を危くするものであるといわねばならない。

家政学は愛情，特に家族間の愛情についてその本質，その成立ないし増大または減少の要件を追求することが急務であると考えられる。「愛情」が免罪符のごとく，家庭内で万能的な力を持つものでもない。

愛情の本質の追求は，最約的にはおそらく愛情否定の方向に進むであろう。